

農林水産大臣賞受賞

高齢者も障がい者も若者も みんな農業で笑顔になる

とくていひ え い り かつどうほうじん のうらくえん
受賞者 特定非営利活動法人あがた農楽園
(栃木県足利市)
あしかがし

■ 地域の沿革と概要

あしかが
足利市は、栃木県の南西端に位置する人口約 14 万人の都市である。まちの中心部を渡良瀬川が東西に流れ、北には足尾山地に連なる山々が、南には関東平野が大きく広がり、東京から 80km 圏内にあるとは思えないほど、豊かな自然が残されている。

また足利市は、室町幕府を開いた足利尊氏公の故郷であり、市内には足利氏ゆかりの寺社や日本最古の足利学校など、数多くの歴史・文化遺産が点在している。

産業は、古くは織物の町として栄えたが、近年はアルミや機械金属、プラスチック工業などを中心とした商工業都市になっている。

当団体の活動拠点である あがた 県地区は、南部の みくりやたんぼ 「三栗谷田圃」と呼ばれる平坦な水田地帯の中心地にある。古くから良質なコメの産地だったが、安土桃山時代、渡良瀬川に堰を築造して水を引き入れたことで豊かな田園地帯が形成された。戦後の大規模な圃場整備事業が実施されると、生産量は飛躍的に伸び、以来長く、足利市の農業を牽引してきた。

しかし、近年の農業を取り巻く諸環境の大きな変化に伴い、農家の世代交代が進まず、農業従事者の高齢化が進行している。このことは、農業生産の減少にとどまらず地区の活力という面でも課題となっている。

一方、ここ数年本地区農業に明るい兆しが見え始めている。意欲のある農業者が、首都圏に近接する産地の強みを生かし、収益性の高いイチゴやアスパラガスなどの園芸品目へと事業

第 1 図 位置図



写真 1 史跡足利学校



写真 2 三栗谷田圃

の拡大や多角化を進めて成果を上げはじめると、足利市の内外を問わず、新たに農業にチャレンジする若者が増えはじめ、ここ5年間で10名を超える新規就農者が誕生し、新しい農業の担い手として育ち始めている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

あがた農楽園が活動する県地区は、古くから農業生産が活発で昔ながらの田園風景が広がる魅力ある農村地域であるが、少子高齢化や農業の担い手不足、耕作放棄地の増加など、多くの課題に直面している。

当団体では、多様な人材が輝ける地域活性化の取組を行うために、まずは地域の将来像やその実現に向けた法人の取組内容を「あがたの未来プロジェクト」として見える化し、住民と共有したことで、活動の賛同者を増やし法人を設立することができた。

設立後、約2年という新しい組織でありながら、社会福祉法人をはじめ、市内小中学校や女性会など多くの主体と連携しながら、活動の幅を広げてきた。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
組織の性格	機能的な集団等
人口等	総人口 144,746人 総世帯数 61,617戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 720経営体 個人経営体数 700経営体 団体経営体数 20経営体 (内、法人経営体数) 17経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 17,776ha 耕地面積 2,260ha 田 1,900ha 畑 366ha 耕地率 12.7% 一経営体当たり耕地面積 3.1ha

※四捨五入のため、計と内訳が一致しない場合がある

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

県地区で長く農業を営み、少しずつ後進に経営を譲り始めた3人の仲間が、数年前から東武鉄道県駅前に小さなイルミネーションを飾り、また、ビニールハウスを会場にイベントを催すなど、余暇を使って地域活動を行うようになった。

そんな折、かつて障がい者施設（就労継続支援施設B型）で働いた経験をもつ農業者から、障がい者は、一般の人とは比べものにならない低い作業対価で働いている、という実態について聞く機会があった。そして、この地区にも、働く意欲はあってもその機会の少ない高齢者や、さまざまな事情から思うように働けない若者が、意外に多く生活していることに気づき、「働きたいのに機会がない人、働いているのに最低賃金にも届かない人、いろいろな人が、働く喜びを感じながら交流できる場所をつくりたい」との思いが沸いて、自分たちで何かできることはないか考えるようになった。

この頃、この地区に圃場整備の計画が持ち上がったことで、行政の関係者と定期的に話し合いの場がもたれるようになった。時にはビニールハウスで、ナマズの天ぷら鍋を囲みながら、農家への支援策や全国の事例などを学んだ。考えていた障がい者や高齢者の問題についても意見交換を行った。

そのような機会を重ねるうち、この地区に点在する使われなくなった農地やビニールハウスを、農園として再生して農業を再開することができれば、障がい者や高齢者のための

新たな就労の場ができること、そしてみんなに喜ばれているイルミネーションやイベントも、一緒に楽しむ仲間の輪が広がれば、この地区に元気が出るのではないか、このように活動のイメージが具体的に becoming に従って自信が深まり、具体化のための行動を起こすことになった。

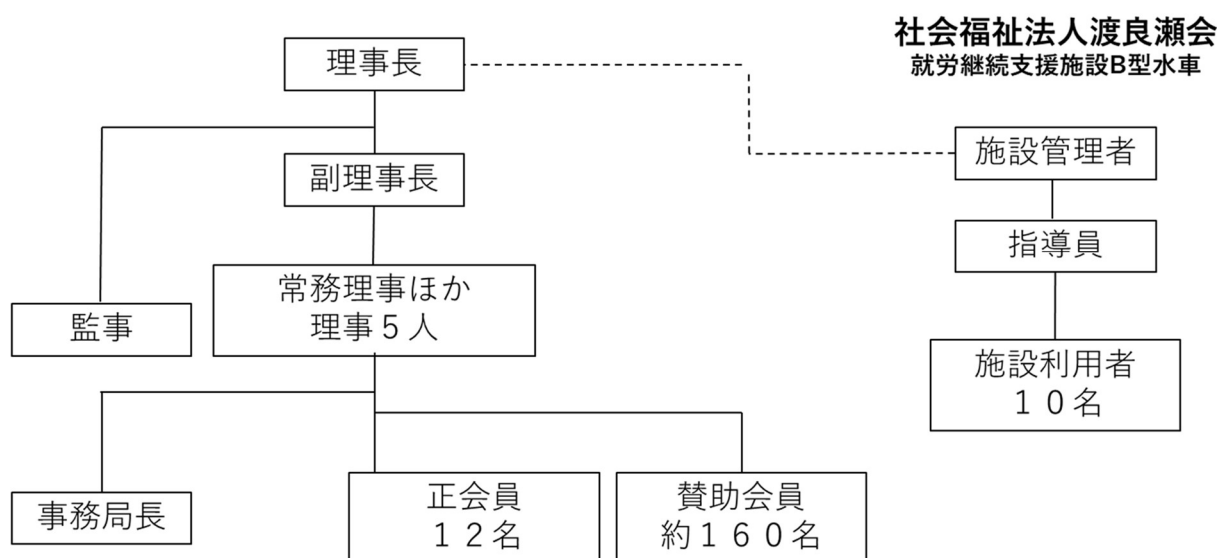
(2) むらづくりの推進体制

令和2年11月、近隣の住民に声をかけ、特定非営利活動法人設立の説明会を開催すると、20名を超える参加者全員の賛同が得られ、すぐに設立要件を満たすことができ、同12月13日には総会を開いてNPO法人を設立した。

組織体制は、定款に定めた正会員22名（設立当初14名）と賛助会員約160名で、正会員は、農業経営者、農業従事者、新規就農者、県町婦人会役員、元会社員、地方公務員など多方面の人材が参画し、うち9名が理事長その他役員として日々の運営を担っている。

賛助会員は、20代から高齢者まで幅広く、市外からの会員も数多く在籍している。

第2図 むらづくり推進体制図



主な連携団体は次のとおりである。

ア 社会福祉法人渡良瀬会（農福連携）

設立以来、社会福祉法人渡良瀬会（就労継続支援施設B型「水車」）をパートナーとし、施設を利用する障がい者10名が、農作物の栽培をはじめ、ほとんどの活動を共にし、障がい者にも、自然の大地で作物を育てる楽しさや苦労、報酬を得る喜びを実感してもらうため、畑の土づくりから栽培、収穫、加工・販売までの全ての農作業を一緒に行っている。



写真3 さつまいも栽培の様子 左から苗植え、芋掘り、箱詰め、販売

イ 足利市（官民協働）

足利市からは、市有地 2 か所の除草を受託しており、そのひとつが、県地区から 2 km ほど離れた藤本観音山古墳周辺の未利用地である。古墳は、東日本で最大級の前方後方墳で、それを取り囲む約 2 ha の田畑は、文化財の埋蔵地のため足利市が買収したが、未利用の状態で長く続き古墳を訪れる人もほとんどいなかった。

このため、農作業のノウハウを生かして除草を行い、景観向上のためコスモス畑を整備し、秋の初摘みには、近所の幼稚園や福祉施設の入所者を招待し、地域の人にも大勢集まっていた。

花の期間中は、摘み取りを自由にしたところ、周辺のまちからも多くの見物客が訪れ、美しい風景とともに古墳の知名度は大きく向上し、このような官民一体の取組が、貴重な文化財（古墳）の利活用と地域の賑わいにつながっている。

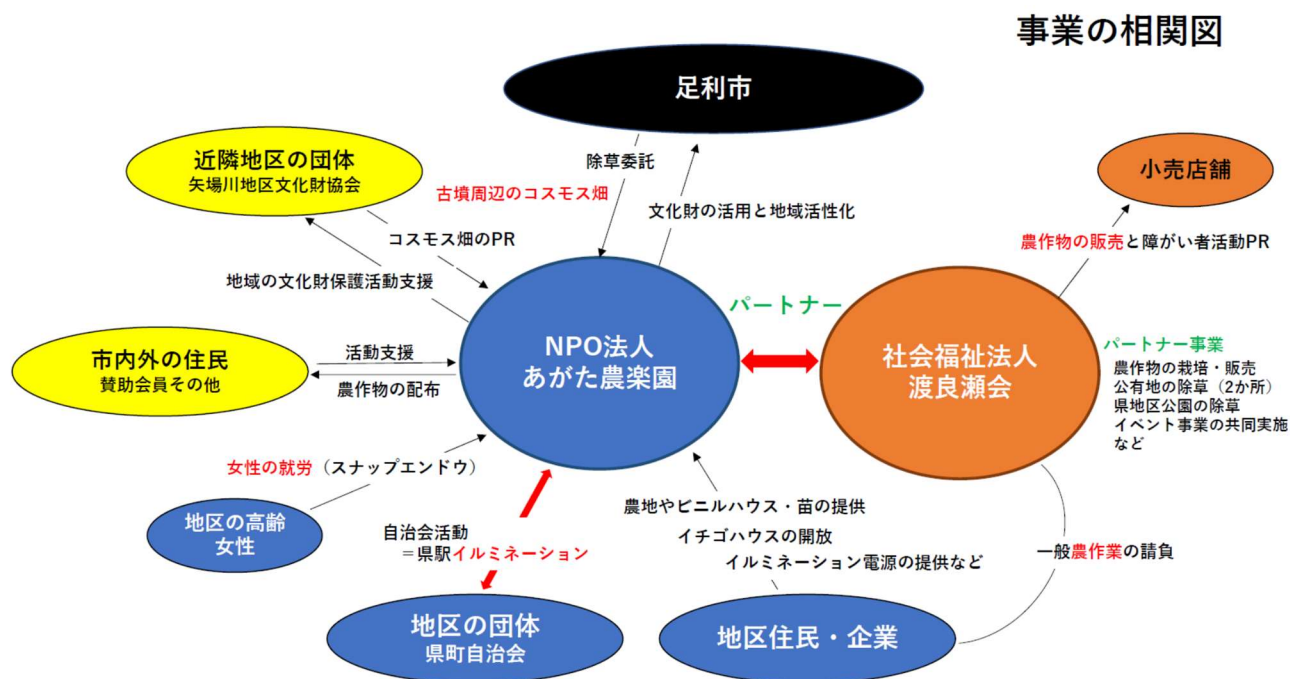


写真 4 藤本観音山古墳とコスモス

ウ 矢場川地区文化財愛護協会（相互協力）

古墳の保存活用のため、矢場川地区の住民で組織された団体で、あがた農楽園が除草による環境美化とコスモス畑を作ったことが縁となり、協力関係ができた。イベントチラシ等の町内回覧や法人の説明看板設置など P R 活動の協力をいただく一方、コスモス畑の中に古墳の由来や価値についての説明板を設置するなど、愛護協会自身の啓発活動も行っている。このように、お互いが協力し合い良い相乗効果につながっている。

第 3 図 むらづくり連携体制図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

社会福祉法人と連携し、使われなくなった農地や施設を再生して、ジャガイモやサツマイモ、スナップエンドウを栽培している。スナップエンドウの栽培に当たっては、障がい者だけでなく、高齢者も雇用するなど新たな就業機会を創出している。

また、市から管理委託を受けた土地をコスモス畑とし、景観の向上と地域への誘客につなげているとともに、鉄道駅周辺施設でのイルミネーション装飾を行い、地域のイベントとして点灯式を行うなど、都市と農村の交流促進に努めている。



写真5 ジャガイモ定植作業

2. 農業生産面における特徴

(1) 障がい者等の新たな就労機会の創出

使われていない農地約 10,000 m²を農園に変え、生産農地として再利用したことで、障がい者 10 名と地元女性 9 名の新たな就労機会を生み出すことができた。

農作物は、品目の選定やビニールハウスの利用など栽培方法に工夫を凝らし、年間切れ目のない就労を可能とすることで工賃向上に結び付けている。

農作業は、法人の農業経験者が交代で指導に当たっており、障がい者は作業能力に個人差があり、収穫時期の判断などが難しいため、作業の分業化や福祉施設指導員との連携により作業効率の向上に努めている。



写真6 スナップエンドウ栽培

(2) 6次産業化への取組

農作物は、まず賛助会員に配布し、その他は地元の小売店舗で販売するほか、足利と桐生の卸売市場に出荷している。農作物のパッケージには、開発したデザインを統一的使用することで、他の生産者との差別化（ブランド化）を図り、販売力の強化に努めて、令和4年度からは、販路拡大のためネット販売を開始した。

スナップエンドウは、収穫終盤には規格外品の増加や収穫量が減少するため、渡良瀬会が運営するカフェレストランで加工、長期間保存ができる「ピクルス」を作り、新たなオリジナル商品として販売している。

県内では生産の珍しいスナップエンドウを、足利で初めて市場流通ルートに乗せ、複数の地元スーパーなどで販売できたことは、地産地消の推進とともに、将来、他の生産農家と一緒に、新しい産地づくりができればと希望をもっている。



写真7 スナップエンドウのパッケージ



写真8 スナップエンドウのピクルス

(3) 経営改善への取組

ビニールハウスの改修など初期投資に大きな費用がかかり、運営資金に十分な余裕がない中で、作業効率が低くても、障がい者には一定水準以上の工賃を確保していることから、農業経営は厳しいのが現状である。

そこで、国や県の補助事業を積極的に導入するとともに、農作業のノウハウが生かせる市有地や公園の除草作業を受託して、就労機会の確保と収入の増加に努めている。

(4) 後継者の育成と農福連携の取組

設立2年目となり、新規就農者を含む8名が新たに正会員に加わった。その多くが積極的に障がい者の指導に当たることで、農作業も更に円滑に進むようになった。

また、コスモス畑の害虫駆除では、若い農業者の提案で、薬剤の散布にドローンを使用するなど、最新技術も取り入れられるようになり、活動の良い刺激となっている。

正会員は、経験豊かなベテラン農業者が多く、若い農業者にとって団体の活動への参加は、先輩農業者との情報交換の良い機会となり、それぞれの農業経営に生かされ、地域農業の担い手として育っている。

苗の運搬やハウス内の除草など、一定の作業を障がい者に任せることで経営の効率化に努めており、この農福連携の取組は、人手不足や高齢化に悩む農家にとって一つの作業モデルとなり、地域に定着していくと期待している。

(5) 女性の活動への参加

スナップエンドウの収穫作業は、障がい者には難しいため、働いていない地区の方に声をかけている。ほとんどが高齢女性だが、作業は週3回、朝の3時間程度であり、適度な就労で収入につながることから大変喜ばれている。

今後は、レシピの普及や新商品の開発など、特に、販売力強化の面において積極的な役割を担ってほしいと考えている。



写真9 スナップエンドウの収穫作業

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 地区周辺環境の改善・向上とコミュニティ活動の強化

荒廃した耕作放棄地を畑に変え、破れたビニールハウスを修繕し、古墳周辺にコスモス畑を作り、閑散とした冬の無人駅周辺をイルミネーションで飾るなど、周辺環境の改善・向上と地域住民の生活に潤いを与えている。

イルミネーションの点灯式は、県町自治会と共同で行われ、女性会が来場者に手づくりの甘酒をふるまい、敬老事業としてお年寄りを招き、アマチュアバンドの演奏やアマチュア落語の披露も行われるなど、この日は、多くの住民が集まり夜店も出てお祭りの賑わいとなる。

この活動は、冬の恒例行事として地区に定着し、進む高齢化や新型コロナの影響によって地域活動が停滞する中で、コミュニティの再生と自治会活動の強化に大きく寄与してお

り、足利市の田園景観の保全や新たな景観を作る取組として高く評価され、令和4年度足利市建築・景観奨励賞を受賞し、会員の大きな励みとなった。



写真10 イルミネーション点灯式

(2) 高齢者・障がい者・若者の交流

じゃがいもの収穫作業は、中学校の農業体験学習の場として活用されている。生徒たちが、障がい者や高齢者と一緒になって農作業に汗を流すことは、食育の理解促進だけでなく、助け合う気持ちや思いやりの心を育む意義のある取組だと考え、積極的に推進している。



写真11 農業体験学習

(3) 住民間・近隣都市住民との交流

閑散とした農村地区に作った美しいコスモス畑やイルミネーションは、住民の憩いや語らいの場となり、また、近隣の都市から多くの見物客が訪れることで、地域や世代を超えた人々の交流が促され、農村の賑わいと活性化につながっている。住民の期待が高く、令和4年度は、コスモス畑を更に別の場所にも作って開放し、イルミネーションは、電球を大幅に増やし、飾りつけを一般に公募する「市民参加型」として実施した。

双方とも、来場者の投稿で情報がSNSで拡散されるため、今後、インスタグラムを活用した写真コンテストなど新たな事業展開を試みながら、更に交流の裾野を広げていきたい。



写真12 コスモス畑の開放